鹿児島県の彌生式諸遺蹟について

河　口　貞　徳

一 序　言

現在迄我々が発掘調査した遺蹟で未だ発表していないものについて概略を述べ，且つその全体についての考察をほどこして忘失にそなえたい。

昭和24年以来の調査遺蹟に谷山町笹貫遺蹟，根占町千束遺蹟，阿多村中津野遺蹟，鹿児島市一の宮遺蹟，鹿児島市県立医大遺蹟，上伊集院村東昌寺遺蹟があるが，この中一の宮は考古学雑誌に東昌寺については別項に報文を記したから之についての概報は略したい。

二 笹 貫 遺 蹟

谷山町上福元笹貫，田原万伍氏畑地がそれである。昭和20年3月海軍燃料貯蔵所が構築された際，同氏畑地は通路として施工され，3.5 *m*の深さ迄掘り下げられた。この時地表下3 *m*より夥しい土器が出土したので田原氏は完全土器及び文様あるものを谷山中学に提出したという。

昭和24年9月18日谷山中学生徒より同遺蹟の話をきき，現地を調査したところ，遺蹟の中心部はすでに失われているが，田原氏の畑地北隣の3 *m*余り高い畑地の境界斜面に地表下(上段畑面より)2*m*より2*m*50の間に濃厚な遺物包含層が露出していることを確めることが出来たので，昭和24年9月23日，24日，及び同11月8日，9日の前後4日間，三友国五郎先生及寺師見国先生のおいでを願って，鹿児島市高等学校一部学生，小林君，山下君，永田君，町田君の協力を得て試掘を試みたのである。

発　掘

上段畑地と原田氏畑地との境界斜面が自然の遺蹟断面となっているので，これについての観察を述べる。地表より2 *m*の厚さに黒褐色壌土層が水平に位置し，以下は粘質の黒色土層である。この両層の堺目以下約50 *cm*の厚さに土器破片等の遺物が包含され，その範囲は18 *m*に及んでいる。

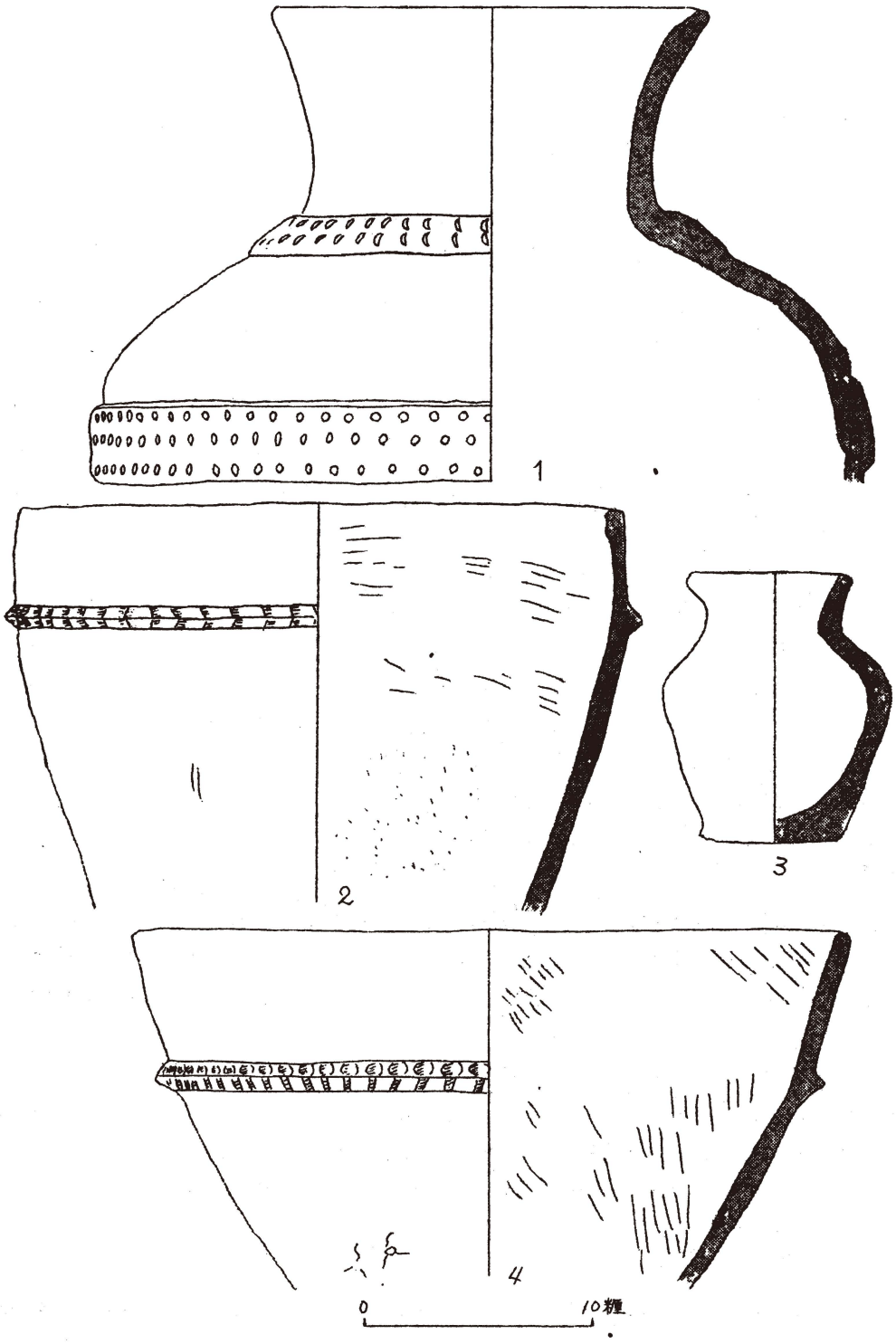
発掘はこの遺物包含層に向って横からえぐる様に行った。

遺物は弥生式土器破片を主として斉瓮土器をともなっている。一部を5 *cm*毎に切って層位掘をこころみ，127片の土器片について分類したが，文様の変化についての結果は出なかった。只斉瓮は包含層中上層部の25 *cm*にのみ少量(6／127　4.7％)出土する事が判明した。

遺　物

出土遺物はほとんど土器片であるが，中に石錘として使用したと思われる自然礫及石錘叩石

第一図



が出土した。

土器は壷形，鉢形，高杯形，土器等である。胎土は砂粒を多く含み，粗であるが，高杯形土器のみは精撰したものを使用している。

器　形

1　壷形土器

口縁部は直口に近く，唇部に近く少しく外反している。胴部は卵円形で肩部が張り，下部にほそり，底は尖り底，丸底又は小形の平底である。肩部及腹部に凸帯を附したものが多く，竹管文，斜格子文，半截竹管文，縄状文等の文様を凸帯に附している。（第一図１）凸帯には布目の圧痕を印したものが見られる。凸帯を附してないものは小形に多い。

2　鉢形土器

a．バケツ形で口縁部に近くわずかに内湾したものもある。頸部につまみあげ又は幅の広い凸帯を附し，底部は上り底の器台をつけこの裏面に疣状の突起のあるものが上り底26箇中18箇をしめ，残り8箇が突起を有していない。（第一図2.4）

大形のもの多く，直径30㎝以上のものが多い。

b．鉢形土器中小形で楕円形の平底，浅鉢がある。之は凸帯を有しない。

3　高杯形土器

胎土が精選され，赤色に塗料を施した土器がある。小形壷，無頸壷，高杯形土器等である。高杯形土器は杯部は直口で．筒形の柱部と円錐形の裾部とから成っている。

4　底　部

とくに壷形及鉢形土器の底部について，器形と数量を調査した結果，次の数字を得た。

右の調査資料は発掘した総ての底部の中，楕円形浅鉢の底部及器台中充実した底部1箇は分離して別に考察を加える事が適当と考えたので之をのぞいた。

形　式	数量	%
とがり底	4	28.5
丸底	4	28.5
平底	6	43.0
小　計	14	100
突起あるもの	18	69.3
なきもの	8	30.7
小　計	26	100
総　計	40	

三　中津野遺蹟

日置郡阿多村中津野，坂口佐吉氏宅地内である。

本遺蹟は吹上浜砂丘より水田地帯をへだて，海岸より約5㎞の中嶽北西麓に位置し，標高30㎞の台地をなしている，弥生式の遺蹟である。

坂口氏は宅地を北側の県道の面迄掘り下げるため，約1.5㎞の深さ迄土取りを行った。この時南隅に夥しい土器群が出土し南日本新聞社に調査を依頼された。

筆者は同社に依嘱され，昭和25年4月19日小原記者と同行，現地に赴き試掘を行った。既に完全土器及完全に近い土器

が坂口氏宅に保存してあったが，当日の試掘でも多くの完形品を得た。試掘の結果，堅穴らしい形跡が認められた。

同年5月3日より5日迄玉竜高校生池水寛治君を伴って，第二回目の発掘を行った。前回の堅穴を確認し，多くの完形土器を得た。地主の都合によって堅穴を完全に発掘し得なかったのは残念であった。

<発掘経過>

前記土地切下げにより宅地の南隅に於て土器が出土した為この部分は土採りを中止し，縄張りして保存してあったので，遺蹟の一部分は破壊されながらも原状を推察することが出来た。

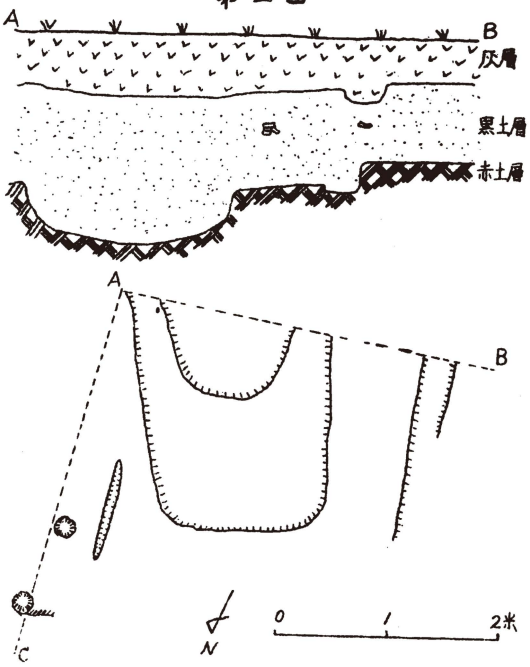
採土の際，地表より80㎝乃至1㎞の深さに於て赤褐色粘土層に達したのであるが，前記南隅に至って粘土層が深く落ち込んでおり，このあたりから土器が出土し始めたのである。

発掘は粘土層の落ち込んでいる部分約3㎞四方の範囲にわたって行った。その中北方の部分は既に一部採土されているので，この部分は基盤粘土層に達する部分迄発掘し，南側隅の未だ採土してない部分を幅最短50㎝，最長1㎞，長さ3㎞の範囲を地表より発掘した。

表層は灰褐色土層で30㎝乃至57㎝の厚さをもち，この下に黒色土層が50㎝乃至70㎝の厚さに存在し，以下赤褐色粘土層である。第二層目の黒色土層の下部が土器包含層をなしている。（第二図参照）

表層及黒土層の上層は土器を出土しない。地表より80㎝に達して始めて土器を出土して1㎞迄は破片が多い。出土範囲は，大体粘土の落ち込みによって出来た堅穴の範囲に限られている。

第二図



100～120㎝には稍まとまった土器，大きな破片等が出土し，120㎝以下特に堅穴中央の第二段の落ち込み（第二図下）に完形土器が多量に出土した。

<堅　穴>

宅地であるために充分の発掘が出来なかったが，第二図に見られる如く，径5米内外の堅穴（壁高24㎝～36㎝）に更に中央に床面を（36㎝の深さ）長方形に掘りくぼめ，（発掘範囲内においては142㎝×215㎝）之に第三段のくぼみを径120㎝の略円形にほりこん（深さ18㎝）でいる。

径5㎞内外の堅穴に第二の堅穴を構築し，更に第三の円形くぼみ

を有している。

堅穴の周辺には巾30㎝，深さ6㎝の溝をめぐらしていたと思われるが，北西部は採土の際破壊せられて一部を残すのみである。堅穴北東隅には柱穴2ケが認められた。（第二図）

<遺　物>

土器のみで，他の遺物は出土しなかった。壷形，甕形，蓋形及び小形土器等が出土した。

<器　形>

◇壷形土器

a．大形の長楕円形の器胴に外開きの頸部が附き丸底である。胴部に一条の絡縄凸帯を有する。凸帯を附した部分が稍々張り出した器形と，長楕円形との二通りある。黄褐色，焼成良好である。（第三図4.5）

b．小形で球形に近い稍々長手のものもある。高さ23㎝位から10㎝位迄である。胴部から頸部への移行がなだらかで，口縁部の方へ自然に外反している。

凸帯を有しない。（第三図2）

c．無頸壷　小形で丸底　稍々細長い胴部を有し無頸である。器形整わず口縁部は薄い。（第三図1）

◇甕形土器

頸部でしまり，口縁部へ外反している。中空の器台を附している。器台の底部に突起を有するものはない。高杯に近い器形のもの1箇あり，炭素が附着していない。（第四図1.3.7）

◇蓋形土器

鉄兜に似た形で径34㎝乃至16㎝のものがあり，大型のものは形が整っているが，小型のものは形がいびつで，粗雑であり，外面は凹凸があり，内面は稍平滑で外面の様な黝黒褐色でなく，褐色を呈している。刷毛目がある（第四図2）

◇小形手捏土器

椀形で平底のもの，内面は篦の刻目あるものあり，径14㎝高さ7.7㎝である。

椀形の手捏土器で中空の器台を附したもの，高さ8.8㎝位から3㎝位迄のものが多数ある。（第四図）。

<遺蹟概観>

発見した堅穴は一部破壊され，一部は未発掘のため完全な資料ではないが，判明した範囲に於て考察すると，本来の堅穴は径5ｍ内外の隅丸方形の堅穴で，粘土層に掘り込まれ，その中央部には更に方形に落ち込み（発掘せる範囲では，142×215㎝，深さ36㎝）があり，この中心部に略円形の凹所が構築されている。堅穴壁より最底部迄を計ると約1ｍとなる。(第二図)

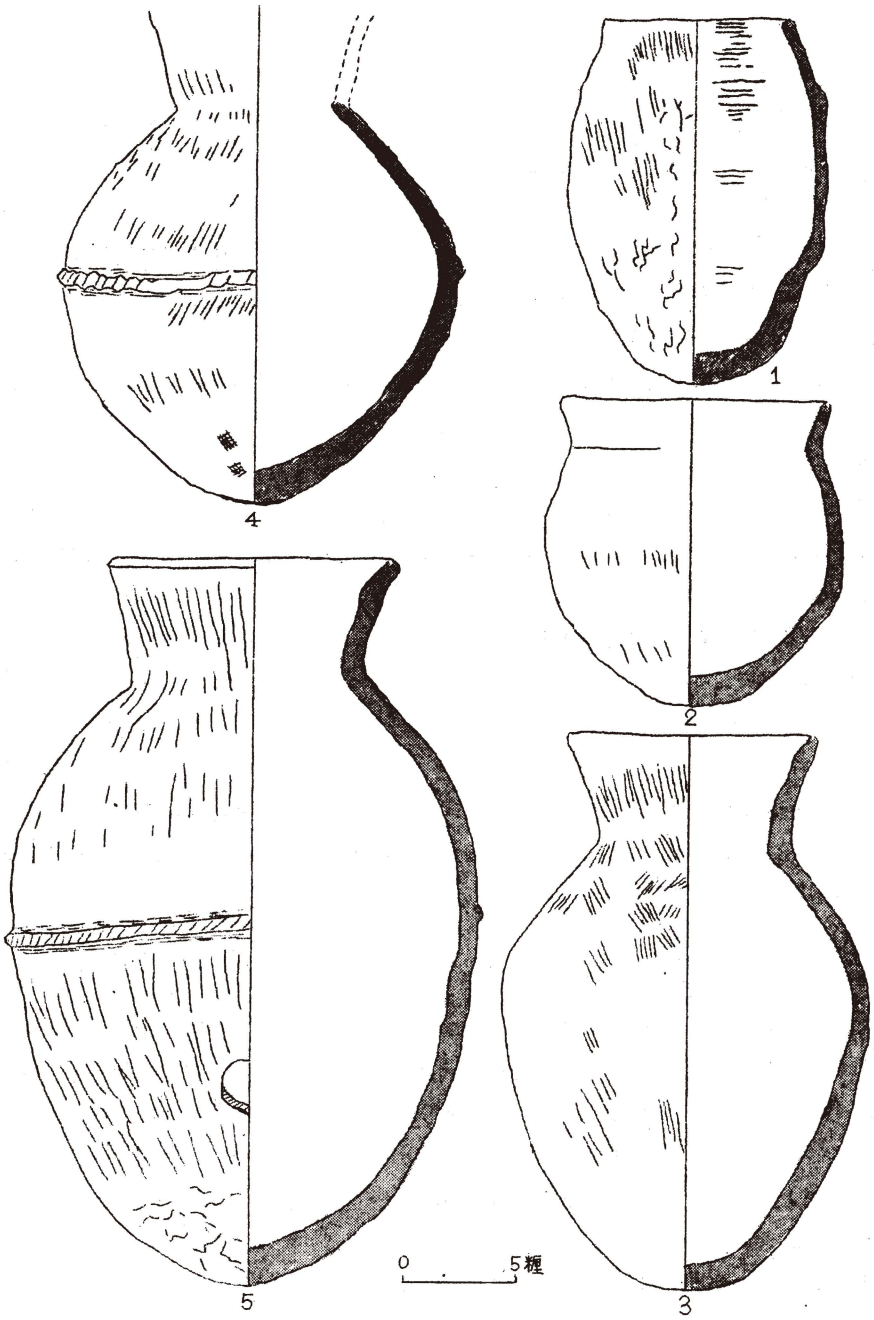
恐らく住居址であって，中央凹みは炉跡ではあるまいか。

土器は腹部に幅の狭い絡縄凸帯を附した楕円形の丸底壷，凸帯を有しない球形に近い丸底壷中空の器台付甕形土器，蓋形土器，手捏小形土器が組合せをなして出土している。

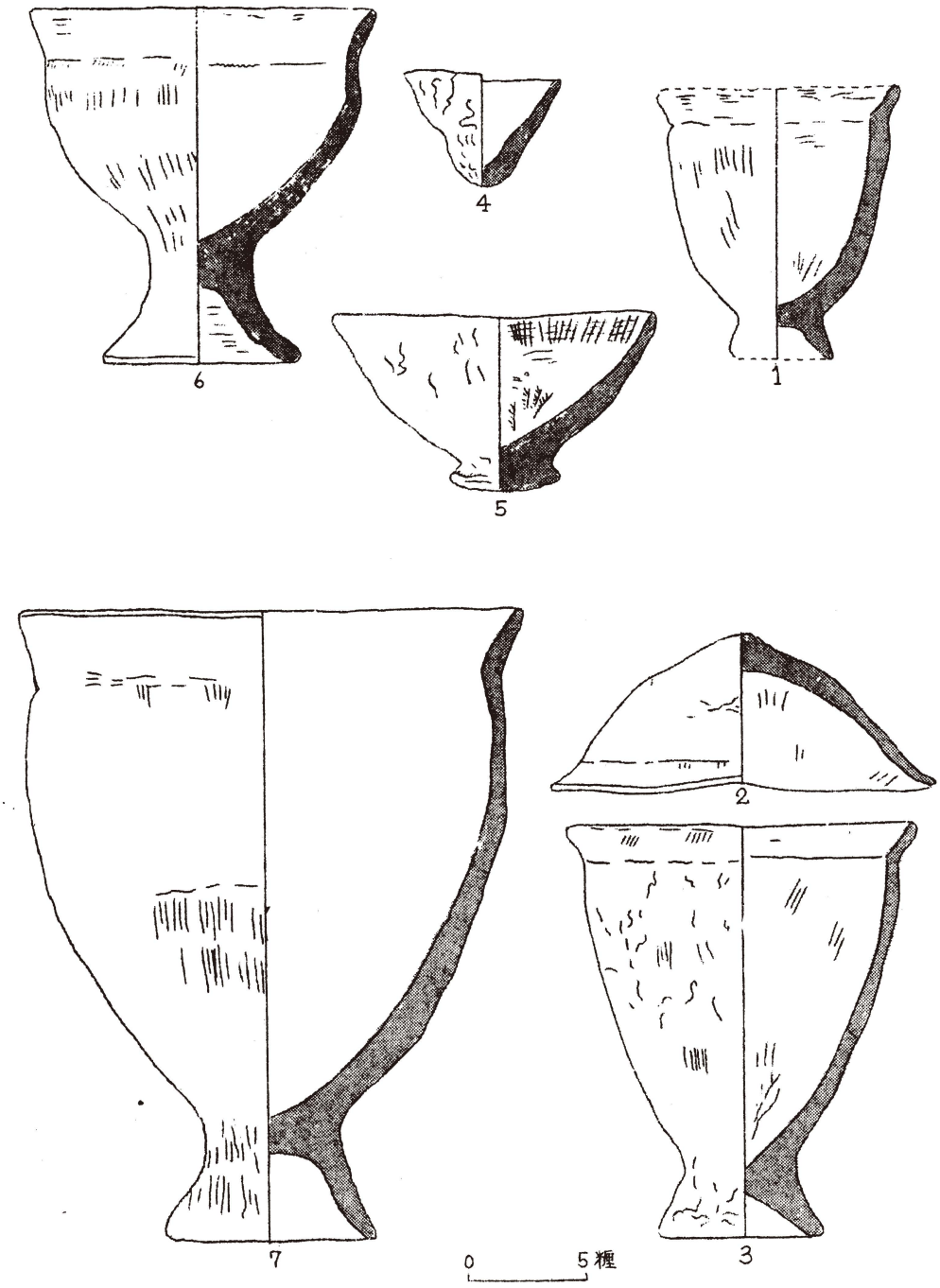
以上の完形土器40個以上は皆中央凹所に於て出土している。

この遺蹟に隣接した中津野1193番地今掛のしえ方に於て昭和23年1月末家地引にて完全壷形土器2箇が出土しており，他にもこの台地上より度々土器が出土している点より考えて，相当大きな聚落遺蹟であろうと思われる。

第　三　図



第　四　図



四 千 束 遺 蹟

肝属郡根占町千束が遺蹟地である。

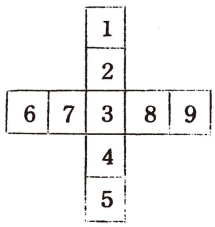
雄川下流の小沖積平地は城内熔岩台地の突出によって北を限られているが，此の熔岩台地の末端に連って南方へのびた小丘陵があり標高50 *m*を示すが，この小丘の東側に切り込まれた谷に面する小台地面積約3町歩の平坦な畑地が全面豊富な遺物を包含する弥生式の遺蹟である。

発掘経過

この遺蹟については昭和15年10月頃川畠巌雄氏，同24年12月河口，同25年1月桑原福夫氏，同年6月10日北園博氏等の人々が調査していられる。

昭和25年12月2日3日の両日，神田三男氏の斡旋により根占町に依頼を受け，三友国五郎氏と河口貞徳が発掘にあたり，池水寛治，神田三男，其他根占中学校先生，鹿大学生，根占中学生徒等の諸氏の援助を受けた。記して謝意を表する。

今回の発掘は761番地畑を選び，巾2 *m*，南北10 *m*のトレンチとこれと直交して東西に巾2 *m*，長さ12 *m*のトレンチを十字形に発掘した。



南北のトレンチは2 *m*毎に区画し，北より1,2,3,4,5区とし，東西のトレンチは2.5 *m*毎に区画し，東西トレンチとの交叉部をのぞき西より6,7,8,9区として区分発掘した。

表層45 *cm*は壌土（耕土）その下に黄色土の層が20 *cm*の厚さに略水平を保って存し，その下が灰色を帯びたシラス層である。表層と黄色土層との堺目には薄い火山灰層が断続して見られた。おそらく耕作の際この層を破ったものと思われる。

20 *cm*の黄色土層が遺物包含層で多量の遺物が存している。最下のシラス層は遺物を存しない。

遺物の出土は1,2,3,5,6,7区に最も多く，他は余り出土していない。7区には斉瓮の蓋形土器と弥生式の鉢形の略完形品とが並んで出土し，（第5図5,6），6区に於ては弥生式大形壷の傍に鉄製刀子が出土し，3区南西隅に於ては野桃の種を出土した。

第1区西側及第8区南側には径20 *cm*，深さ約30 *cm*の柱穴を発見した。1区においては柱穴を境として北側は約10 *cm*低く落ちており，6区及7区にもややシラス基盤の落ち込みが認められる。又1,2区，6,7区はもっとも土器の大破片が出土している。

遺　物

北園氏の調査による資料についてはこの一部を鹿屋において，又他の一部を神山小学校において一見した。その中に鉄鏃及弥生式の壷形土器に附した，巾の広い凸帯の部分を認めた。又大形黒色の研磨された高杯の完形品が見られた。

器　形

壷形土器

肩部が張って胴部から底部へかけて急に細り，丸底である。頸部は稍外反して短い。頸部及

腹部に絡縄凸帯或は広巾の凸帯を附している。広巾凸帯には格子目文，竹管文，刺突文，半截竹管文等を附している。器面を研磨した土器も出土している。

鉢形土器

a　頸部に絡縄凸帯を附し，深鉢又はやや急に開いた鉢形で，底部は中空の器台が附してある。中空の底面に疣状のとがりがあるものが多い。

b　底部は小形の平底で急に外方へ開いた浅鉢形土器である。絡縄凸帯を附していない。

c　底部が長方形をなした浅鉢である。研磨された小形の黒色土器である。

高杯形土器

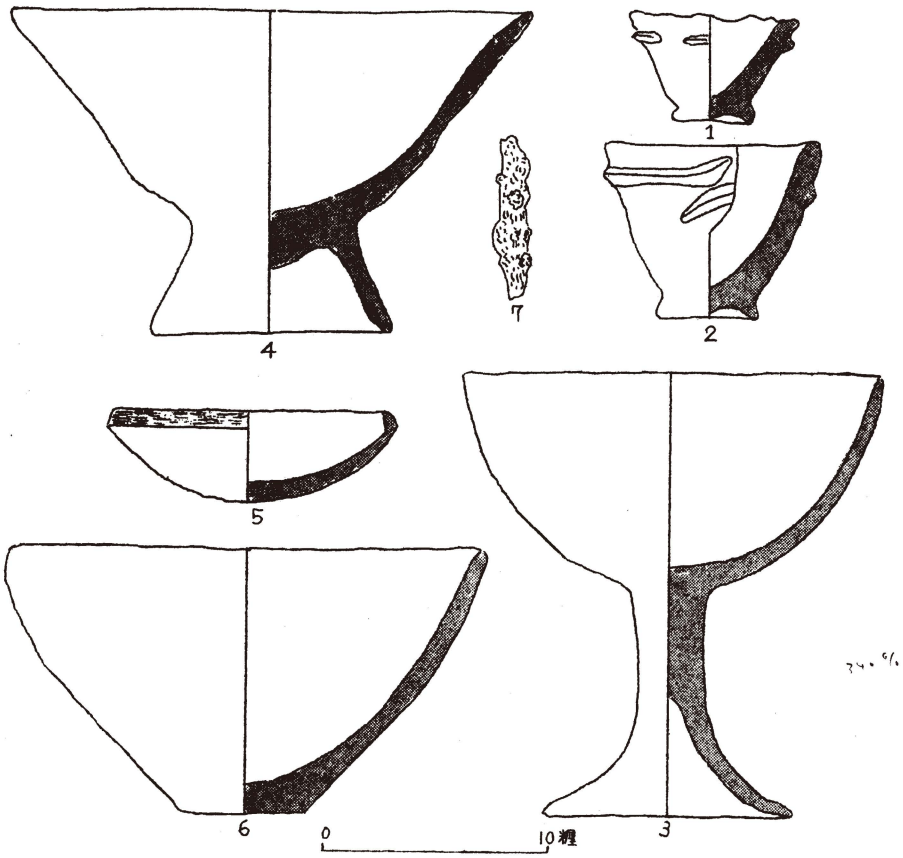
半球形の直口の杯部に，筒形の柱部と円推形の裾部とから成っている。朱塗である。黒色大形の高杯もある。

小形手捏土器

小形半球形無頸壷　　絡縄凸帯を頸部に附した鉢形土器等である。（第5図。）

以上の形式は笹貫の土器に非常によく似ており，同一形式と言えるようである。

第　五　図



其他の遺物

自然遺物としては野桃の種子と鉄製刀子（第五図7）と思われるものが出土している。刀子は長さ7㎝，上部巾8㎜，中央より少し下部巾8㎜である。上下は稍々欠損したものかと思われる。

遺蹟概観

この遺蹟は非常に多くの土器破片が埋存されていて，その拡がりも相当大で，3町歩程の台地全面にわたっている。発掘の結果柱穴の存在等から考えて住居址であろうと思われる。鉄刀子の併出は此の遺蹟の特徴をなしている。斎瓮を併出する点においても笹貫の遺蹟に一致している。石器は今のところこの発掘においても前調査者の調査においても発見されていない。

五　鹿児島県立医大遺蹟

鹿児島市郡元町鹿児島県立医大敷地，東南隅にある。この遺蹟の東方5町に一の宮の弥生式遺蹟があり，この間遺物の散布が引き続いている。一大遺蹟であって，南北2町東西5町余の小沖積台地が弥生式の遺蹟となっている。

発掘経過

25年一の宮発掘の際医大事務官有村栄助氏より発掘の依頼を受け，昭和26年3月20日より4月5日迄16日間の発掘を行った。

発掘責任者河口貞徳，補助者川辺哲郎，高野虎雄，宇都一嘉，大田泰正，佐多，田畑，（卒業生1名）

県立医大建築工事の際，敷地の東南隅に野井戸を掘ったが，この井戸から弥生式土器が出る事に有村事務官が気ずかれたのであった。

発掘は同野井戸の跡と推定される場所に隣接して，講堂東側空地を講堂と平行に（北より東58度の方向）巾1㎞，長さ5㎞のトレンチをこころみた。同トレンチは更に1㎞延長し，巾も50㎝拡大した。又トレンチ南西端より直角に東南方へ巾2㎞長さ2.5㎞のトレンチを発掘した。地表より約80㎝の深さに始まる黒土層の上部20㎝が遺物包含層をなしており，弥生式土器を出土した。この中に小量斎瓮を伴出している。

更に黒土層を発掘した結果地表より1.30㎞で砂層に達した。之が基盤をなしている。然しながら1.30㎞より更に深く基盤の落ち込んでいるカ所を発見し，基盤を追求したところ，1.6㎞に至って始めて基盤に達し，この面において再び土器破片数個と木炭及灰のある場所を2カ所検出した。以上の点より住居址なることが推定されたので以後は住居址発掘の方針で作業を進めた。

作業を進めるにつれて，竪穴住居址壁が孤状に現われ柱穴も発見したので，必要に応じ逐時発掘範囲を拡げて行った。

円形住居址で径4.4㎞，炉はなく，床面はきわめて硬く明瞭であったので，発掘するのに好都合であった。

層位関係

表層　褐色の混砂層で50㎝ ― 56㎝の厚さを有し，略水平である。極少量地表に土器の小破片が出土しているが野井戸を掘った時の土器が散布したものであろう。

第二層　厚さ30㎝，黄灰色砂層，略水平である。遺物を包含しない。

第三層　前記砂層の下は厚さ50㎝の黒土層である。更にこの層は三層に分つことが出来る。上部10㎝ ― 20㎝，紅味を帯びた黒色土層で粘着力が強い。土器を多量に包含している。中部20㎝，黒褐色土層である。土器を包含しない。下部15㎝真黒色土層，砂を混じ上層に比し粘着性が少い。上の層との堺目に薄い砂層をはさんでいる。この層の上部に土器が少量散布している。

第四層　最下層で砂層である。基盤でこの層には遺物を包含しない。住居址はこの層に掘り込まれている。（第6図）

前記の如く遺物は第三層黒土層の上部と下部に別個の遺物包含層が存在している。上層は多量の土器片が包含されているが，下層はごく少量散布しているのみである。

上層には，棒状の白色の物質が出土しているが，或は流木が腐敗したものではないかと思われる。有村事務官を介して医大組織の教授にみてもらった結果，骨であるかもしれぬとの事であった。（図版参照）

トレンチの北部地域には稍まとまった土器があり，復元出来得る破片も見られ，之は粘土で底部を修理しており，その粘土が残存していた点などより考えて，流水によって運搬されたものとは思われないふしもあった。（図版参照）

下層は前記の如く上層包含層との間に遺物を含まぬ厚さ20㎝の黒褐色土層を挾んで最下真黒土層の上部に遺物を出土する。竪穴の部分では床面に密着して土器片が遺存し，柱穴中より出土した土器片も少量見られた。

かく上層と下層とは分離して存在しているが土器の形式より見る時はその間に何等の差異を見出す事が出来ない。しかも上層と同様に下層においても斎瓮を伴出しているのである。

以上の事実に基づいて考えると，上下両層の土器は形式的には同一形式に入るのであるが，層位的には断層が見られるのでこれを如何に解釈すべきかが問題となる。

第1には下層住居址が流水の堆積作用により埋没し，他の同様形式の遺蹟から流下した遺物がその上へ堆積したものと考えられる。この考は地形及水路等より見ると当然考え得ることであるが，上層遺物の出土状況より見るとにわかに断定は出来ない。

第2には，この形式の土器文化が非常に永く続いた結果であると考えられるが，このことは中間層の堆積に要した期間の如何によって当否が考えられると思われる。

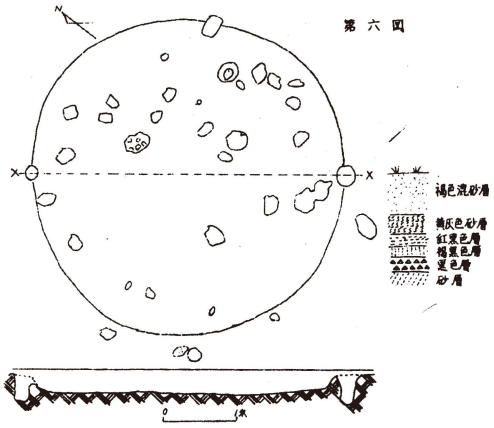
第3には，下層住居址が流水のため埋没し，その後に同時代の人々が再び生活を続けたもので，その埋没に要した時間はごく短期間であったと考える。

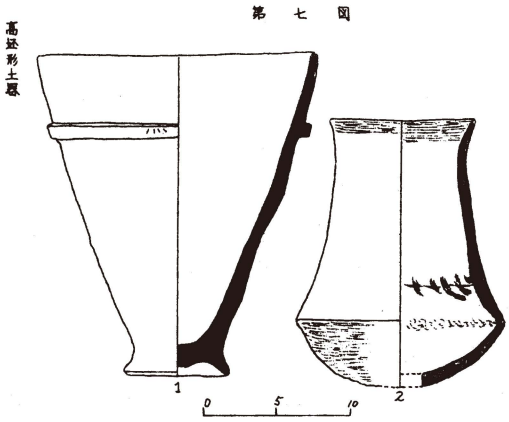
以上のいずれであるか，或はその他の理由によるかはここに決定をさけ，後考に待つことにしたい。

住居址（第6図）

住居址は基盤の砂層中に掘りくぼめてつくられている。円形竪穴住居址である。

径4.42 m，砂層面よりの深さは約30 cm，心もち東方へ深くなっている。床面はきわめてかたくかためられ，平坦で黒土層との堺が明確であった。





柱穴は周壁に接して5個，周壁外に4個，周壁内床面に24個を数え，とくに東半部に密集している。周壁に接する柱穴は深く30 cm以上であるが，床面のものは深さ20 cm内外で，柱穴かどうかうたがわしいものもある。或は床面全部のものが他の用途を有するものかもしれない。周壁に接する柱穴のカ所が主柱であったであろう。炉址はなく，南部に灰及木炭が少量床面に出土したのみである。

竪穴の深さについて再考すべき点は竪穴外部の下層土器が砂層面になく，約15 cm上部の黒土層上に遺存する点と，この部分に薄い砂層が存在することである。之は竪穴のつくられた当時の地表面は砂層面でなくして，それより15 cm上部の黒土層上の面であった事を証するものであろう。かく考えれば竪穴の本来の深さは45 cmであったことになる。

土　　器

この遺蹟の土器は上下二層に分かれているが，形式上は一致するので一括して記述する。

壷形土器

肩部の張った丸底又は小形の平底の胴部に短い口頸部を附したもので，口縁部が稍々外反している。頸部と腹部に巾の広い凸帯を附し，之に斜線文，格子状文，竹管文，半截竹管文等の文様をつけている。すべて笹貫又は一の宮上層の土器に一致している。

甕形土器

頸部に凸帯を附し，口縁部は稍外反し，肩部も張っている。完形品がない。

鉢形土器

バケツ形に口縁部から胴腹底部と，直線的に小さくなっている。底部は中空の器台を附し，頸部には凸帯を有する。（７図１）

高杯形土器

赤塗のもので杯部に円管形の柱部と円錐形の裾部からなったものと，塗料を施さない大形の厚手のもので，杯部は不明である。台部は筒形の柱部と裾部との区別がなく移行しており，この部分に小孔を有している。

其の他の土器

球形の底部から急角度をもって胴部へ屈折し，その境が稜をなし，筒形の胴部からそのまま口縁部に移行する。直口である。壷形土器の一種であろう。（第７図２）

手捏の小形の土器も出土した。

石　　器

軽石製の一孔を有する。長方形の板が出土している。

六　総合的考察

以上の記述の遺蹟の主体をなす土器及一の宮遺蹟，上伊集院村東昌寺遺蹟の土器を通観すると，土器の形及口縁部の形態，底部の形態，凸帯の形式，並に文様等の考察によって二大別することが出来る。その第一は東昌寺の弥生式土器及一の宮の下層の土器で，最近鹿児島市玉里町旧練兵場において発見した遺蹟の土器もこの形式である。第二は笹貫，千束，県立医大，中津野及一の宮上層の土器である。

然して第一と第二とは更にそれぞれ二分することが出来る。

第　一

これを更に二分して１様式，２様式とする。

１様式は，東昌寺遺蹟の土器の中，弥生式の主体をなすものである。焼成は黝色のもの多く素地中には砂粒を多く含んでいる。

壷形土器

口頸部よく発達し，腹部強く張り，頸部に沈線をめぐらし土器表面を研磨したものもある。

すわりのよい平底である。

甕形土器

口部と頸部の径差少く，腹部からなだらかに細くなるもの及頸部から急に屈折する様な形に細くなるものとある。口縁部は発達して平らな面を有し，頸部に狭いが，外方へひどく張り出した凸帯を附し，口縁部の外縁及び凸帯に刻目を入れたもの及び口縁部は外反し，頸部に段を有し，刻目を施したものである。底部はよく発達した平底であるが，稍々厚みを有し，次の2様式の充実した器台への発達径路をしめすものである。

北九州第一様式（遠賀川式土器）（弥生式土器聚成図録）に類似するもので，この形式の波及したものと思われる。南九州において最も古い形式であろう。

2様式

一の宮（考古学雑誌第37巻第4号一の宮遺蹟報告，河口貞徳）下層玉里が之に当る。焼成黝色。大隅式土器（考古学雑誌第36巻第1号40頁鹿児島県の弥生式土器，寺師見国）及南九州A様式（弥生式聚成図録）に略一致する。北九州第一様式及第二様式（須玖式）（弥生式土器聚成図録）の両者に類似する。

壷形土器

口頸部がよく発達した広口壷で，上縁が内外に張り出し頸部，胴部に幾条かの平行凸帯を飾っている。絡縄又は三角形梯形等の断面を有する凸帯である。頸部から胴部へなだらかに移行し，胴は張っている。底部はすわりの良い平底である。

甕形土器

胴部にふくらみを有し，なだらかな曲線を描いて下り，底部は充実した脚台を附している。口縁部は著しく発達し，上面は内外に張り出し口縁部内面には口縁部附着の際の痕跡をとどめているものもある。頸部に一条乃至三条の凸帯を附している。器台状の底部は1様式の底部の発達したものであろう。

第　二

之を二分して3様式と4様式とする。

3様式

笹貫，一の宮上層，千束，県立医大等の土器がこの様式である。赭褐色のものが多い。粗糙である。

壷形土器

肩部が張り，下部へ急にしまり，丸底又は小形の平底である。低い口頸が附けられ，頸部及胴部に広巾の凸帯を繞らしている。凸帯には竹管文（考古学雑誌36巻第1号鹿児島県の弥生式土器第3図）篦描文等を附している。凸帯を附さないものも器形は同様である。

甕形土器

頸部少し内側へくびれ，外反りの口縁部を有し，頸部に凸帯を附している，底部は中空の器台を附している。底面には疣状の突起を有しているのが特徴をなしている。中空器台のはずれ

たものがあって，丸底の壷形土器と同様の底部を形成し之に輪状の器台部を附着して構成したものである事を示している。この時の丸底（ややとがり気味）が疣状に残ったものである。

鉢形土器

バケツ状の深鉢及浅鉢がある。頸部に凸帯を絡らし，底部は中空の器台を附している。底面は疣状の凸起のあるものが多い。多く大形である。

小形には長方形又は楕円形の底を有す鉢形土器がある。尚平底の鉢形も見られる。

高杯形土器

半球形に近い杯部に筒形の柱部，円錐形の裾部を附したもので赤色塗料を施してある。

土質は精選したものを使用している。

4様式

中津野の土器が之に当る。川辺方面及薩摩方面に於て多くこの形式のものを見る。赭褐色のものが多い。

壷形土器

楕円形の稍細長い胴部に低い口頸部を附し，胴部に1本の絡縄凸帯を附している。底部は丸底である。胴部の稍々張ったものもあるが，肩の張った3様式とは区別出来る。

絡縄のないものも同様の器形をなしている。

甕形土器

頸部がしまり，口縁部が外反し，胴部にふくらみを有し，中空の器台を有しているが，裏面に疣状の凸起を有するものはない。又凸帯を有しない点においても3様式と相異っている。

以上の如く弥生式を四形式に分つことが出来る様である。

フイリッピン考古学とその太平洋諸島人種起源に対する関係

Philippine archaeology and its relation to the origin of the Pacific islands population.

オトレイ・ベイヤー，　国分直一訳

今ここに筆者が1926年以来フィリッピン諸島，特に呂宋の西南部地方において行った系統的な考古学的調査の今日迄の成果につき簡単に紹介するに当って，我々の仕事の年代順はしばらくこれを無視して，所論の力点を主として全般的成果の評価に置き，特にそれがアジア本土並に太平洋諸島におけるその近接地域の住民に影響を及ぼすような広般な諸問題に如何に適用されうるかについて吟味してみようと思う。

1926年当時のフィリッピンの如きほとんど無開拓の新分野を探査するには，解釈上若干の誤